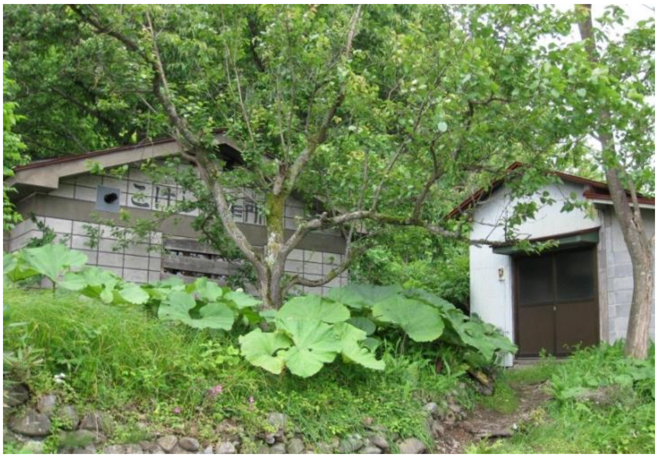
「今晃さんのこけし遍歴」

「今晃さんのこけし遍歴」

今晃さんのこけし遍歴を文献や資料から訪ね歩き、その足跡をまとめた。

今晃さんは、昭和 28 年（1953 年）4 月 23 日、秋田県大館市に生まれる。今さん自身は「高校時代までは陸上競技をやり、図画工作は得意でなかった」という。その今さんが「津軽こけしの源流を求めて！」と、敢えて、冬期には３ｍほどもの積雪、家全体がカマクラ状態？にもなるような豪雪地の嶽温泉開拓地に移住され、こけしを作っておられた。

「冬期、今さん宅玄関」



「奈良靖規こけし工場・十和田工芸所跡」

昭和 47 年、高校３年９月、新聞記事で「大湯のこけし後継者がいない」と知る。「自然に生きたい」と考えており、何か「ピーン」と来るものがあり、その日のうちに訪ねた。工房には土日に通い、卒業と同時に住み込み就職をした。木地挽きを大類漣次工人に教えてもらったのは数ヶ月だけで、後は、独学であった。こけし（「Ａ０１９」）は簡単に作れた。木地挽きのみを行い、描彩は全て奈良さんが描いていた。懇意にしていた大湯温泉「花海館」にあった小松五平、長谷川清一こけし(「Ａ００１」「Ａ０１７」)を見よう見まねで作り、名古屋こけし会で頒布される。名古屋こけし会は新人工人発掘に努めており、いち早く今晃さんに注目をされた。

昭和四七年一月二六日　読売・朝刊

職人志願

大学受験のシーズン。だが今晃君（一八）＝写真＝には、そんな気苦しさや不安はない。進学せずにコケシ職人になろうと心に決めたからだ。

「かあさん、ぼく、大学へは行かないス」。去年の暮れそういったら、両親はびっくり。コケシづくりをやるといったら、モーレツに反対された。

今君、秋田県の名門、県立大館鳳鳴高の三年生である。成績も決して悪くはない。友人たちも「オマエ、変わってるなあ」といった。

コケシとの出会いは偶然だった。昨年の九月、新聞のニュースに、同県鹿角郡十和田町・大湯温泉に伝わる大湯コケシが後継者に困っていると出ていた。なにか心をひかれた。汽車で一時間あまり、その日のうちに、十和田工芸所の奈良靖規さん（六二）をたずねた。

奈良さん、十和田町の教育長をつとめたこともあり、儒学の素養がある。コケシの話のあいだに、なにやらむずかしい単語も飛び出したが、いままで学校や家庭で聞いたことのない新鮮さ、おもしろ味があった。

陸上競技の選手でスポーツは好きだが、図画、工作はそれほど得意でもない今君が、毎週土曜日の午後、花輪線にゆられて奈良さんのもとへ通いはじめた。

そばで見ていると簡単にできあがるコケシが、いざ自分で木を削ってみると、とてもむずかしい。なかなか“生き”て”こないのである。

一生つとまるかな、とは考えた。しかし「人に使われるような男になるな。これで一本立ちの経営者になれ」という奈良さんのことばがピーンと胸にひびいた。

「会社をやめてラーメン屋をはじめたなんて新聞の記事を読むと、大学を出て就職してもいずれボクもこうなるんじゃないかって気がして」

市職員の父もよくよく話をきいて賛成した。今春卒業したらすぐ奈良さんの工房に住みこむ。

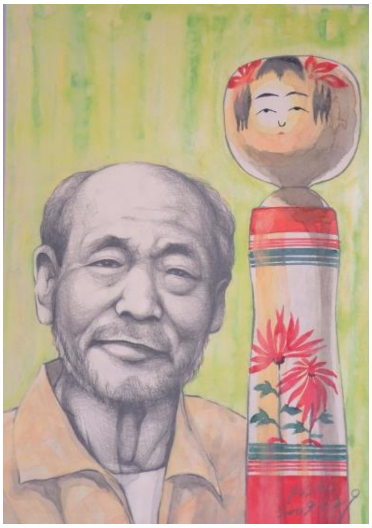
「大会社のサラリーマンになるクラスメートに、はじめは負けてもゴールでは勝てると思います」

今君、コケシみたいに明るい表情である。（ち）

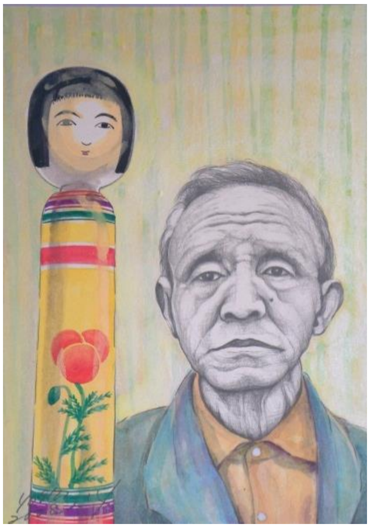
「読売新聞昭和 47 年 1 月 26 日記事」

「Ａ０１９」「Ａ００１」　「Ａ０１７」

大湯温泉の入り口に、かつて、高雅なこけしを作った老工人小松五平さんが住んでおられ訪ねた。そこで職人の気迫に触れた。五平さんは極貧の生活で、中風で倒れられ死期は見えていた。その老残の身でなお、中風でヨイヨイ揺れる利き腕を懸命に上げて「春になったら、手術で治ったら、またこけしを作るんだ」と言った。衝撃だった。本当の職人だった。「オレもここまでなれるべか。ならば、必ず」と思った。ある時、子どもが描いたような古いこけしを見た。「何だ、こんなものオレだって」、しかし、描けない。「こけしの心が分かっていなかったのだ」と気づき、ここから今さんのこけし修業の旅が始まる。



「小松五平」



「長谷川辰雄」

49 年 12 月末、佐々木金一郎さんに弟子入りが決まっていたが、弟子入り前日（50 年 1 月 30 日）急逝された。葬儀時、長谷川辰雄さんに弟子入り（2 月）が決まる。51 年 3 月下旬まで、大鰐の金一郎作業場で、師匠と一緒に制作（「Ａ０１８」）をする。4 月、弘前市門外町に辰雄師匠と一緒に移住し、辰雄型こけしを制作する。師匠には「ヘタクソ！」と言われ、「署名はきちんと書くように」と習字を習い、楷書体で書く。

師匠の木地下を挽きながら、辰雄型のこけしを制作した。51 年 10 月、師匠の息子健三さんが帰ってこられ、健三さんの木地挽きの進展に伴い、52 年 6 月、辰雄師匠から弟子あが

「Ａ０１８」

る。52 年 7 月、本田功さん宅にてこけし制作をする。署名は、本田さんに　「弘前で作るこけしだから、弘前と入れた方がよい」と、53 年 3 月まで「弘前今晃」である。

53 年 2 月、「木の花」16 号「戦後の佳作 16・今晃」で北村勝史さんが取り上げ、「若干モダンさはあるにせよ、表情にはあの津軽独特の不気味さが漂っている。木地形態も調子がよい。、、、、大いに島津型を研究し、その中の良い作を手本に自らを発見していって欲しいものである」と述べている。また、「木の花」同号「島津型の工人たち（二）」で、矢内謙次さんは「、、、、未開の荒れ地を開拓して、津軽の野にこけしの花を咲かせたように、今の世にも想像力豊かな若者が現れてもよいではないか。かつての長谷川辰雄が、一人で 6 人ものこけしに描彩をしたように、多様性のある者がいてもよいではないか。、、、、津軽はまだ若い、今まで冷遇されてきた島津のこけしこそ、これからは、前途たるや悠々である。誰か出でて我が渇きを癒してくれる者やおらぬか」と述べ、今晃さんの出現を渇望、示唆されていた。

Ａ００５

「描彩・大鰐の金一郎作業場にて長谷川辰雄と（５０年）」

作れないヨ」と、一筋の涙を流された。私には、今さんが十代の頃、病床の小松五平さんを訪ねられ、「こけし職人になるんだ！」と決意された場面が蘇える。「これからが勝負だ！」と語っておられた今さんの気持ちを思うと、たまらない。

9月初旬に退院、自宅での療養をされておられるが、嶽での、豪雪の中での生活は困難と判断された。また、「こけし制作も難しい」と木地や工具なども整理をされ、来年春には秋田の大舘市に転居を予定されている。今さんのこけし人生 40 年、嶽に 30 年間、この地を発たれる覚悟をされた今さんのお気持ちを鑑みると、ただただ、寂しさのみが募る。

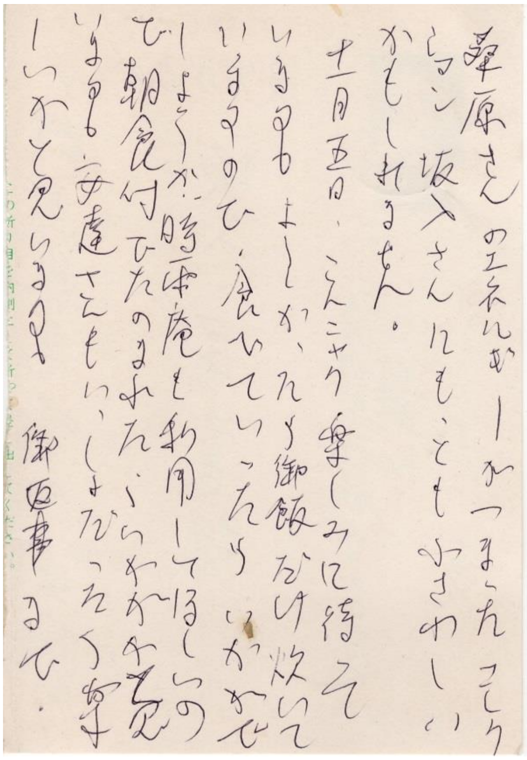
私は、今さんのこけしを集大成した「木おぼこ･今晃」―今晃こけし図譜―を制作、来年春、今さんの 61 才の誕生日 4 月 23 日に発行すべく進めていたが、この様な事態になり、困惑と混乱の中で、万感の思いを込めて制作する。今さんには、ぜひとも、健康を回復されて、また、こけしを作っていただきたいと希うものである。

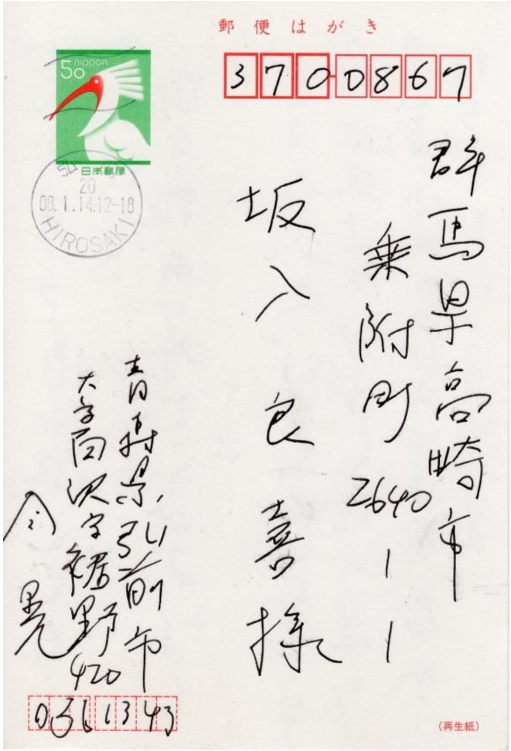
（平成 25 年 12 月記）

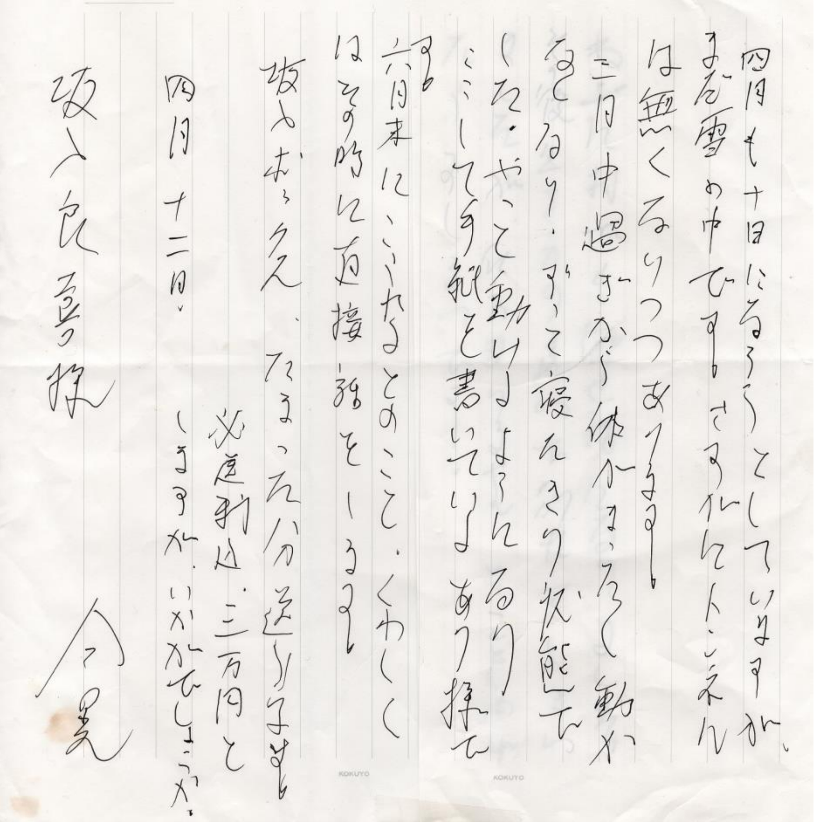
「今さん宅訪問･坂入ボックスのこけし(24 年 6 月)」

「豪雪の自宅(25 年 1 月)」

「今さん宅･木地資材（25 年 11 月）」


葦原さんのエネルギーがつまったこけし
らしい坂入さんにもとてもふさわしい
かもしれません。
十一月五日、こんにゃく楽しみに待って
いますもよしかったら御飯だけ炊いて
いますので食べていったらいかがで
しょうか。晴採庵も利用してほしいので
び朝食付ひたのまれたらいかが
いますも安達さんもいっしょだったら楽
しいかと思いますよ。御返事まつ。


郵便はがき
370-0867
群馬県高崎市
乗附町2640-1
坂入良喜様
青森県弘前市
大字高杉字緒野420
今晃
036-1343


四月も十日になろうとしていますが、
まだ雪の中です。さすがにトンネル
は無くなりつつあります。
二月中過ぎから体がまいって動か
なくなり、ずっと寝たきり状態で
した。やっと動けるようになり
こうして手紙を書いております。
六月末にこられるとのこと、くわしく
はその時に直接話をします。
坂入ボックス、たまった分送ります
必着料込二万円と
しますが、いかがでしょうか。
四月十二日
今晃
坂入良喜様

「今晃さんからの手紙」

今さん宅には年に 3 回ほどお訪ねした。こけしを作っていただくと「坂入ボックス」に貯めておいていただき、年に数回送っていただいた。

左手紙は、平成 25 年 4 月 12 日付、最後の「坂入ボックス」が送られてきた。